

ACT!

支援者さまと国境なき医師団(MSF)をつなぐニュースレター

2024年2月号



▶▶ **ベネズエラ**
アデリアさん
熱帯雨林の先住民集落に暮らす。18歳で第一子を出産。

© Matias Delacroix
© Cecilia Rivero/MSF



▶▶ **南スーダン**
ナイアリエップさん
自宅で3日間陣痛に耐えた末、MSFの病院にたどり着いた。

© MSF/Verity Kowal



▶▶ **ボリビア**
マリベルさん
出産後、MSFのスタッフとなり母子保健の啓発に取り組む。

MSFの
医療施設で
出産した
お母さんだよ！



ドクターしんぞー
© Ayano Kinoshita

すべての
新しい命
のため
にお母さんと

▶▶ **アフガニスタン**
ナキーバさん
山岳地帯にあるMSFの診療所で第二子を出産。



妊

娠・出産の過程で1日に約800人の女性^{※1}と約6400人の新生児が命を落とすと推計されています^{※2}。医療の不足や紛争・災害……体の自由がきかない妊産婦や赤ちゃんは、日々さまざまな危機にさらされているのです。今号では母子の命と健康を守るための国境なき医師団(MSF)の挑戦を報告します。

※1 世界保健機関『妊産婦死亡率の傾向2000-2020』(2023年)、
※2 国連の子どもの死亡率推計に関する機関間グループ『子供の死亡率の地域別の傾向2022』(2023年)



新

たな命の誕生はドラマに満ちています。妊娠がわかったとき、妊娠期間中、産声上がる瞬間……喜びや驚き、時には悲しみも。そして残念ながら、ドラマが常にハッピーエンドとは限りません。

最新の推計によると、2020年の世界の妊産婦死亡数は28万7000人^{※1}。命を落とす主な原因は高血圧や大量出血、感染症などですが、いまの日本なら重症化は稀です。産前健診で見えられ治療されるか、出産時の処置が迅速だからです。

一方、妊産婦死亡率の高い地域ではさまざまな危険が安全な出産を阻み、妊産婦と赤ちゃんの命や健康を常に脅かします。表紙に登場するお母さんと赤ちゃんは、危

険をくぐり抜けて生き延びた人たちなのです。

アデリアさん（表紙左上）は18歳。熱帯雨林に暮らすワラオ族で、近くには医療施設がなく、一度も産前健診を受けていません。あま

りの痛みに恐怖を感じ、カヌーで2時間かけて国境なき医師団(MSF)の診療所に来たそうです。

彼女のように、産前健診はおろか基礎的な医療すら受けられない人びとの数はいまも膨大です。家族や伝統的分娩助産者などの助けが得られても、容体が急変すれば、なす術がありません。母体が危なくなれば、赤ちゃんの命や健康にも危険が及びます。

「7人産んで、生き残っているのは

2分に1人
世界の妊産婦死亡数^{※1}

母子の命と健康を守るMSFの挑戦

チャド 1/15人
日本 1/2万2000人

女性が妊娠・出産で死亡するリスク^{※2}

※チャドはデータのある184カ国の中で最も高い

28週の早産で生まれた赤ちゃんを胸に抱くお母さん。肌と肌を直接触れ合わせた授乳や抱っこはカンガルーケアと呼ばれ、早産児の心拍数や体温を安定させ、安心感を与える効果がある。

© Nuha Haider/MSF

29万5300件
MSFの年間分娩介助件数(2022)

2人だけ」——ある患者の言葉です。5歳未満で命を落とす子どもの数は推計で年間約500万人。うち実に約47%を新生児(生後28日以内)が占めます。^{※3}生後まもない赤ちゃんが命を落とす原因は、主に早産や先天性疾患、感染症など。いずれも若年や高齢妊娠、多胎妊娠の妊婦、または妊娠高血圧症や妊娠糖尿病などの疾患があるハイリスクな妊婦に多く見られます。

母 子それぞれの不調を産前・産後健診によって早期発見し、治療につなげられれば、発症や重症化を抑えられます。そこで、MSFは産前・産後健診が大切な理由を啓発したり、村落部で移動診療を行ったりと普及を促進。いまや世界40カ国以上

お母さんと赤ちゃんを守る薬と道具

聴診器



胎児の心音を確認する。超音波検査のない施設や移動診療の必需品。

体重計



赤ちゃんの健康状態を確認する。電子体重計や吊り下げ式などがある。

抗レトロウイルス薬 (ARV) 治療



HIVの母子感染を防ぐため、母親にはARV治療、赤ちゃんにも予防的な投薬を行う。

マスク式人工呼吸器



呼吸障害のある赤ちゃんの鼻から気道に空気を送り込み、呼吸を助ける。

光線治療器



赤ちゃんの肌に強い光を当て、黄疸を治療する装置。



で産前・産後健診を展開し、実施件数も過去10年で約40%増加しました。また、より多くの女性にとって、さらに安全な出産環境を整えるため、診療所の建設や高度な医療機器の導入、HIVの母子感染予防などにも取り組んでいます。

こうした努力が実を結び、例えばサイド医師(下記)の勤める病院では新生児死亡率が1年で約14%低下。紛争が長引く中、希望の光となっています。
すべてのお母さんと新しい命のために。MSFの挑戦は続きます。

※1 世界保健機関『妊産婦死亡率の傾向2000-2020』(2023年)、※2 国連児童基金『世界子供白書2023』(2023年)、※3 国連の子どもの死亡率推計に関する機関間グループ『子供の死亡率の地域別の傾向2022』(2023年)

MSFスタッフの声

●ナイジェリア



世界の妊産婦死亡数の4人に1人が集中する国で
セオフィラス・チョノング
(産科救急看護師)



ジャフンの産科救急は、同封のお手紙に登場する産婦人科医・鈴木美奈の活動地でもある。

私はMSFが2008年から運営するジガワ州ジャフンの産科救急で働いています。患者の多くは、容体が悪化してようやく病院に来て、集中治療室(ICU)に入院します。病院が遠い、交通手段がないなどの理由でなかなか病院に来られないのです。特に若い患者が自分の意思で行動するのは難しい。母親や祖母、夫に従う決まりだからです。

ICUには施設の対応能力を超える重症患者も多く搬送されてきます。一方、医療設備が改善され、研修機会も充実して、産科救急チームは日々パワーアップしています。これからも患者にとって最善の治療を追求していきます。

●イエメン



戦火の中で子どもを産み育てるということ
シュロク・サイド
(医師/医療活動マネジャー)



サイド医師の勤めるアル・ジュムフリ病院の産前健診の様子。

2015年3月、空爆が始まり、タイズ県は戦場と化しました。当時私は妊娠中で、多くの病院が閉鎖され、酸素や医療物資が不足する中で出産しました。入院中は病室まで銃弾が飛んできて、動けない私の代わりに、母が生まれたばかりの赤ちゃんを連れてトイレに隠れました。タイズ県はこれまで2つの地区に分断されていて、前線には地雷が散乱し、狙撃手もいます。誘拐や流れ弾が心配で、私は子どもを外で遊ばせることもできません。長引く紛争の中、多くの人が心の不調を訴えています。でも、私はあきらめません。子どもたちがより良い未来を手に行けると信じ、医療活動を続けています。

活動地はいま

突然の紛争激化、自然災害の発生。国境なき医師団 (MSF) が緊急事態に対応できるのは、皆さまのご支援があるからこそ。ウクライナの紛争激化から2年、トルコ・シリア地震から1年たったいま、現地での課題と取り組みをお伝えします。



安全な場所まで搬送する医療列車の集中治療室では、重症患者の体調を管理した。

ウクライナ●長引く紛争で懸念される心の健康

医療列車での患者の搬送、子どもたちの心のケアを実施。

2014年から紛争が止まないウクライナ。国連機関によれば、この2年で市民の死者数は1万人を超え、病院への攻撃も相次いでいます。MSFは緊急対応に切り替え、医療列車による患者の搬送のほか、

医療者の研修や移動診療などを実施。長引く紛争の影響で、子どもを含む多くの人びとの心の健康も脅かされているため、一般外来のほかに、カウンセリングなどの心のケアにも注力しています。

特集ページはこちら→

スマートフォンから



トルコ・シリア●避難先のキャンプで広がる感染症

負傷者の治療や物資の提供、感染症の対策を実施。

昨年2月、大地震がトルコ南部とシリア北西部を襲いました。トルコでは地域の援助団体と連携し、救援物資の配布などを実施。震災前から医療援助を行っていたシリア北西部では、再び内

戦が激化したため、負傷者の治療も急務です。また、過酷な衛生環境の避難民キャンプではコレラなどの感染症が広がりやすいため、MSFは治療や清潔な水の確保を続けています。



シリアの避難民の子どもたち。清潔な水が不足しているため、皮膚の感染症などが広がっている。

今号の感想を教えてください

母子保健を特集した今号の内容はいかがでしたか？ぜひアンケートで皆さまの感想を聞かせてください。締め切りは2024年3月31日(日)です。



MSF連絡帳

領収書のお届けについて

2023年に入金いただいたご寄付の領収書の発送は、本年1月末までに終了いたしました。ご不明点などは、0120-999-199までお問い合わせください。例年、この時期は電話が大変混み合います。早めにご連絡をいただけますようお願いいたします。

確定申告について

MSF日本への寄付は税制優遇措置（寄付金控除）の対象となります。当団体の領収書を添付の上、認定NPO法人に対する寄付として確定申告を行うことで、税金が還付されます。確定申告に関するご質問は、ウェブサイトの「よくあるご質問」をご覧ください。



書籍のご案内

『国境なき医師団』の僕が世界一過酷な場所で見つけた 命の次に大事なこと

スーダン、イラク、イエメン、シリアなど、さまざまな紛争地で活動したMSFの村田慎二郎（日本事務局長）の書籍出版のご案内です。紛争地のリアルな現状、そして活動地におけるエピソードを紹介しながら、生きる上で重要な「命の使い方」についてつづりました。

- 出版社：サンマーク出版
 - 定価：1870円(税込)
- 詳しくは出版社のウェブサイトをご覧ください。



※ MSFでは書籍のご注文を受け付けておりません。書店あるいはオンライン書店でお求めください。

ニュースレター **ACT!** 2024年2月号

発行元 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町 1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL 0120-999-199 通話料無料

平日9:00~18:00 / 土日祝日、年末年始休業

※ご住所など、ご登録の情報についての変更や、「毎月の寄付」の変更は上記までご連絡いただくか、マイページでお手続きください。



※2023年12月の情報を基にしています。最新の情報は国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。

マイページ参照はスマートフォンから

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL 03-5286-6430 担当者直通

平日10:00~17:00 / 担当：荻野、今尾

国境なき医師団ウェブサイト www.msf.or.jp

